

国語「読む力」を向上させるための指導の工夫

千葉県立〇〇〇〇〇〇高等学校 〇〇〇〇〇〇(国語)

一 はじめに

本校の生徒は、国語の授業に対する取組は真面目であり、クラスによっては活発に発言する生徒の姿が見られる。しかし、文章を読んで要旨を捉えさせようとしても、なかなか捉えられず、筆者の意図について考えさせても、自分の考えを、自信を持って説明できないことが見受けられる。

その要因として、考えられることが二点ある。一点目は、生徒が高等学校入学時まで身に付けるべき基礎的・基本的な知識を十分身に付けていないことである。本校では、この問題を解決しようと、三年前から帰りのホームルーム前の十分間に学び直しの時間を設けて、国語、数学、英語の復習をしている。国語については、漢字や語句の意味・用法等を習得する学習を中心に行い、生徒も少しずつではあるが語彙を豊かにしてきている。二点目は、文章を読み取る力が不足していることである。例えば、対話形式で質問されれば、相手の意図を理解できるのに、質問が文章化されていると、質問の意図を読み取れないことが多い。まして、文章に書かれている書き手の考えの中で、何が一番重要なかを根拠を持って捉えることは苦手である。この点を解決するためには、国語の授業において、生徒に「読む力」を身に付けさせることを強化しなくてはならない。今までも、「読む力」を身に付けさせる授業を実施してきたつもりだが、十分な結果が得られていない。学習指導要領の「現代文B」の目標の書き出しには、「近代以降の様々な文章を的確に理解し」とあり、文章を的確に読み取ることの重要性が示されている。何としてでも生徒の「読む力」を向上させなければならぬ。そこで、授業における指導の改善と工夫が必要だと考え、本主題について研究することとした。

二 研究仮説

(一) 授業の実態

授業において、生徒の「読む力」の不足を感じるのには、評論や随筆を取

り上げているときである。生徒は文章の要旨を捉えられないため、「書き手の意図を捉えること」「文章を読み批評することを通して、人間、社会、自然などについて自分の考えを深め発展させること」までに至らない。結局、授業者の解説を生徒がひたすら聞く形態の授業に陥ってしまう。生徒が主体的に文章を読み進める授業からはほど遠くなる傾向にある。

(二) 生徒アンケート

【アンケートA】

△実施時期 平成二十五年九月 / 対象 三年生 百八十名△

質問1 授業で、教材の内容が難しいと感じることがありますか。

- | | |
|----------------|-----|
| ① いつも難しい | 3% |
| ② 難しいと感じることがある | 76% |
| ③ あまり難しいと感じない | 17% |
| ④ 難しいとは感じない | 4% |

○「いつも難しい・難しいと感じることがある」の理由(抜粋)

- | | |
|-----------------------------|-----|
| ・ 評論や随筆は苦手だから。 | 32% |
| ・ 教材の内容によって。 | 18% |
| ・ 言葉が難しいから。 | 11% |
| ・ 書き手の意図が理解できないから。 | 7% |
| ・ 自分の知らないことが書かれていると分からないから。 | 4% |
| ・ 長い文章だと分からないから。 | 2% |
| ・ その他。(無回答を含む。) | 26% |

○「あまり難しいと感じない・難しいとは感じない」の理由(抜粋)

- | | |
|-------------------------------------|--|
| ・ 評論は時々難しいと思うが、その他はだいたい理解できるから。 | |
| ・ 内容を一つ一つ理解して読み進めると、あまり難しいとは感じないから。 | |

質問2 現代文を読み解く上で、必要な知識、力は何だと思えますか。

(自由記述後、自分の意見に近いものを①～⑤の中から選択)

○自由記述

- ・文章から情景や場面を想像する力。
 - ・内容を想像して自分のことのように考える力。
 - ・必要なキーワードを見付けること。
 - ・理解力。相手の考えを読み取ることが上手くなる。それが難しい。
 - ・集中心。省略せずに最初から最後まで読むこと。やる気。
 - ・書き手の考えや言いたいことを自分なりに考えながら読んでいくこと。
- ① 言葉の知識（語彙力） 23 %
 - ② 文章の背景となる知識 7 %
 - ③ 文章の組立てを意識して読む力 22 %
 - ④ 書き手の考えを見付ける力 40 %
 - ⑤ 自分の考えを持つていること 8 %

【アンケートB】

〈実施時期 平成二十五年九月 / 対象 三年生 三十五名〉

現代文の中で、特に評論や随筆が苦手な理由を教えてください。

（複数回答可）（抜粋）

- ・書いた人が何を言いたいか分からないから。 34 %
- ・内容（文章）が長いと分かりにくいから。 29 %
- ・言葉が難しいから。 20 %
- ・内容がごちゃごちゃしていて分かりにくいから。 14 %
- ・内容が身近に感じることができないから。 14 %
- ・書き手の考えに納得できないと読む気持ちが薄れるから。 9 %

（三）アンケート結果の分析

アンケートAでは、現代文の授業で取り上げる教材の内容は「いつも難しい・難しいと感じることがある」と七十九%の生徒が回答している。具体的な理由として三十二%の生徒が「評論文や随筆は苦手だから。」、十八%の生徒が「教材の内容によって。」と、それぞれ回答している。また、「あまり難しいと感じない・難しいとは感じない」の理由には、「評論は時々難しいと思うが、その他はだいたい理解できるから。」とあった。つまり、生徒は評論や随筆に対して苦手意識を持っていることが分かる。ところで、評論や随筆を読み解く上で必要なことは、文章の組立てを意

識し、書き手の言いたいことを捉えることだと考える。質問2では、③と④が該当する。③又は④と回答した生徒の割合は六十二%である。つまり、生徒は、おおむね文章を読み解く上で必要なことは理解している。では、なぜ評論や随筆を読み取ることができないのであろうか。その要因が、評論や随筆を苦手とする理由の中にあると考え、アンケートBを実施した。最多回答に「書いた人が何を言いたいか分からない。」とあり、書き手の意図が捉えられないことが最大の苦手な理由であると分かった。書き手の意図が捉えられない主な要因として、「内容（文章）が長いと分かりにくい」・「内容がごちゃごちゃしていて分かりにくい」ということが挙げられる。つまり、文章が「長い」又は「ごちゃごちゃしている」から要旨を捉えられないのである。「言葉が難しい」「内容が身近に感じることができない」ということも要旨を捉えることを阻害している要因である。これらの阻害要因を解消することができれば、生徒が苦手意識を持つている評論や随筆についても要旨を捉えられ、書き手の意図を捉えられるようになると思われる。

（四）研究仮説

課題である「読む力」の不足の解消、向上のためには、次の二つの力を身に付けさせることが必要だと考えられる。「ごちゃごちゃしている」文章の組立てを把握する力と、「長い」文章を、段落ごとに要点をまとめ、短い単位で読み取る力である。

また、「言葉が難しい」「内容が身近に感じることができない」とあることから、二つの力を身に付け、要旨を捉えることに慣れさせるためには、生徒にとって身近な内容で言葉の易しい文章を読ませることから始めることが有効であると考える。授業において要旨や書き手の意図を捉えさせる機会を増やすことも有効である。

以上のことを踏まえ、次の二つの仮説を立てた。

- ① 文章の組立てを把握するための手順を確認しながら、文章を読むことを繰り返すことで、書き手の意図を捉えることができるのではないかと。
- ② 生徒にとって身近なことが書かれている短い文章を読んで要旨を捉えることに慣れさせていけば、長くて論理的な文章においても要旨を捉えられるようになり、書き手の意図を捉えることができるのではないかと。

(五) 授業実践に向けての留意点

ア 仮説①に係る授業（授業実践Ⅰ）における留意点

本校の生徒は、文章を捉える手順について十分に理解していない上に、評論や随筆の要旨を捉えることに対して苦手意識が強いので次の（ア）（オ）の工夫を施した「ワークシート」【資料1】を用いる。

（ア）学習の目標を明示する。

（イ）段落ごとにまとめることを、視覚的に意識させる配置にする。

（ウ）段落の要点の中心になる文を見付けさせるために、文章を、「事実（具体例）」「筆者の感想や意見」に分ける学習活動が行えるようにする。

（エ）効率的に（ウ）の学習活動を実施するために、文章を事前に分けて番号を付ける。

（オ）段落の要点をまとめる場合は、空欄補充の形をとる。

※ 教材ごとにワークシート【資料1】を作成する。

※ 授業実践Ⅲにおいても教材ごとに作成したワークシート【資料1】を作成する。

イ 仮説②に係る授業（授業実践Ⅱ）における留意点

「生徒にとって身近なことが書かれている短い文章」については、新聞記事を用いる。

(六) 研究手順

実践Ⅰ：要旨を捉える手順を理解させ、書き手の意図を捉えさせる。

実践Ⅱ：要点をまとめ、要旨を捉える力を強化する。

実践Ⅲ：初読で要旨を捉えさせ評価する。要旨を捉える手順を再確認させ、書き手の意図を捉えさせる。

【資料1】ワークシート

留意点ア-（ウ）・（エ）		留意点ア-（ア）	
五木 寛之『生きるヒント』より「悲しむ」 3年（ ）組（ ）番 氏名（ ） その1 学習の目標 段落中の文の組立てを理解する。その上で、段落ごとに要点をまとめ、要約する。ことで、筆者の意図を捉える。 一、文の組立てを理解する。 ・段落を構想する文を、事実（具体例）、問題の投げかけ、「筆者の感想や意見」に分ける。 二、要点のまとめ方 1. 段落の中心となる大切な文を見付ける。 ① 大切な文の見つけ方 ・それぞれの文の役割をみる。それぞれの文の中心から、結論が述べられている文を見付ける。 ・それぞれの文の役割をみる。それぞれの文の中心から、結論が述べられている文を見付ける。 2. 抜き出した文を一文で短くまとめる。 ・主語、述語、キーワードを見つけて文にする。 三、要約のまとめ方 ・段落ごとのつながりを見る。 ・要点をついで文を整理する。必要な要素を、必要でないものを取捨選択する。 四、要約を整理する ・段落ごとの要点を見直し、筆者の伝えたい話の中心明確にし、筆者の主張をまとめる。		（本音） ①「あはれ何の前でござんとか、ちよつとした仕事で暇を訪れたことがあつた。そのとき、地元で出されている広報紙に、こんな意味の文章が載つていて、とても印象的だ。それは、評論家の永徳達さんの書かれたエッセイの一部です。今ここで原文を引用することができないのは残念ですが、そのエッセイの中の短いエピソードにとても心ひかれるところがありました。」① ②「永徳達さんの生家の水は、熊本でも有名な温泉のあつたお宅らしく、かつ明治のころは地元の貴族、文字屋や、政治家や、いづれも名士が集まつて、自由に議論を交わしたりする。一種のサロンのようなおもむきがあつたのを覚えています。そして永徳さんはお家の跡で、時さんか、直に当時のエピソードとして、次のようなことを紹介しておられました。 そのころ、安永家に集まつてくる青年たちの最初の言葉は、こんなにはでも（ ）きげんや、でもなく、なん、悲しいではないか。」② ③「『あはれ何の前でござんとか、ちよつとした仕事で暇を訪れたことがあつた。そのとき、地元で出されている広報紙に、こんな意味の文章が載つていて、とても印象的だ。それは、評論家の永徳達さんの書かれたエッセイの一部です。今ここで原文を引用することができないのは残念ですが、そのエッセイの中の短いエピソードにとても心ひかれるところがありました。』① ④「『あはれ何の前でござんとか、ちよつとした仕事で暇を訪れたことがあつた。そのとき、地元で出されている広報紙に、こんな意味の文章が載つていて、とても印象的だ。それは、評論家の永徳達さんの書かれたエッセイの一部です。今ここで原文を引用することができないのは残念ですが、そのエッセイの中の短いエピソードにとても心ひかれるところがありました。』① ⑤「『あはれ何の前でござんとか、ちよつとした仕事で暇を訪れたことがあつた。そのとき、地元で出されている広報紙に、こんな意味の文章が載つていて、とても印象的だ。それは、評論家の永徳達さんの書かれたエッセイの一部です。今ここで原文を引用することができないのは残念ですが、そのエッセイの中の短いエピソードにとても心ひかれるところがありました。』① ⑥「『あはれ何の前でござんとか、ちよつとした仕事で暇を訪れたことがあつた。そのとき、地元で出されている広報紙に、こんな意味の文章が載つていて、とても印象的だ。それは、評論家の永徳達さんの書かれたエッセイの一部です。今ここで原文を引用することができないのは残念ですが、そのエッセイの中の短いエピソードにとても心ひかれるところがありました。』① ⑦「『あはれ何の前でござんとか、ちよつとした仕事で暇を訪れたことがあつた。そのとき、地元で出されている広報紙に、こんな意味の文章が載つていて、とても印象的だ。それは、評論家の永徳達さんの書かれたエッセイの一部です。今ここで原文を引用することができないのは残念ですが、そのエッセイの中の短いエピソードにとても心ひかれるところがありました。』① ⑧「『あはれ何の前でござんとか、ちよつとした仕事で暇を訪れたことがあつた。そのとき、地元で出されている広報紙に、こんな意味の文章が載つていて、とても印象的だ。それは、評論家の永徳達さんの書かれたエッセイの一部です。今ここで原文を引用することができないのは残念ですが、そのエッセイの中の短いエピソードにとても心ひかれるところがありました。』① ⑨「『あはれ何の前でござんとか、ちよつとした仕事で暇を訪れたことがあつた。そのとき、地元で出されている広報紙に、こんな意味の文章が載つていて、とても印象的だ。それは、評論家の永徳達さんの書かれたエッセイの一部です。今ここで原文を引用することができないのは残念ですが、そのエッセイの中の短いエピソードにとても心ひかれるところがありました。』① ⑩「『あはれ何の前でござんとか、ちよつとした仕事で暇を訪れたことがあつた。そのとき、地元で出されている広報紙に、こんな意味の文章が載つていて、とても印象的だ。それは、評論家の永徳達さんの書かれたエッセイの一部です。今ここで原文を引用することができないのは残念ですが、そのエッセイの中の短いエピソードにとても心ひかれるところがありました。』①	
（オ）の要点をまとめる。 永徳達さんのエッセイの中のエピソードにア ①「あはれ何の前でござんとか、ちよつとした仕事で暇を訪れたことがあつた。そのとき、地元で出されている広報紙に、こんな意味の文章が載つていて、とても印象的だ。それは、評論家の永徳達さんの書かれたエッセイの一部です。今ここで原文を引用することができないのは残念ですが、そのエッセイの中の短いエピソードにとても心ひかれるところがありました。』① ②「永徳達さんの生家の水は、熊本でも有名な温泉のあつたお宅らしく、かつ明治のころは地元の貴族、文字屋や、政治家や、いづれも名士が集まつて、自由に議論を交わしたりする。一種のサロンのようなおもむきがあつたのを覚えています。そして永徳さんはお家の跡で、時さんか、直に当時のエピソードとして、次のようなことを紹介しておられました。 そのころ、安永家に集まつてくる青年たちの最初の言葉は、こんなにはでも（ ）きげんや、でもなく、なん、悲しいではないか。」② ③「『あはれ何の前でござんとか、ちよつとした仕事で暇を訪れたことがあつた。そのとき、地元で出されている広報紙に、こんな意味の文章が載つていて、とても印象的だ。それは、評論家の永徳達さんの書かれたエッセイの一部です。今ここで原文を引用することができないのは残念ですが、そのエッセイの中の短いエピソードにとても心ひかれるところがありました。』① ④「『あはれ何の前でござんとか、ちよつとした仕事で暇を訪れたことがあつた。そのとき、地元で出されている広報紙に、こんな意味の文章が載つていて、とても印象的だ。それは、評論家の永徳達さんの書かれたエッセイの一部です。今ここで原文を引用することができないのは残念ですが、そのエッセイの中の短いエピソードにとても心ひかれるところがありました。』① ⑤「『あはれ何の前でござんとか、ちよつとした仕事で暇を訪れたことがあつた。そのとき、地元で出されている広報紙に、こんな意味の文章が載つていて、とても印象的だ。それは、評論家の永徳達さんの書かれたエッセイの一部です。今ここで原文を引用することができないのは残念ですが、そのエッセイの中の短いエピソードにとても心ひかれるところがありました。』① ⑥「『あはれ何の前でござんとか、ちよつとした仕事で暇を訪れたことがあつた。そのとき、地元で出されている広報紙に、こんな意味の文章が載つていて、とても印象的だ。それは、評論家の永徳達さんの書かれたエッセイの一部です。今ここで原文を引用することができないのは残念ですが、そのエッセイの中の短いエピソードにとても心ひかれるところがありました。』① ⑦「『あはれ何の前でござんとか、ちよつとした仕事で暇を訪れたことがあつた。そのとき、地元で出されている広報紙に、こんな意味の文章が載つていて、とても印象的だ。それは、評論家の永徳達さんの書かれたエッセイの一部です。今ここで原文を引用することができないのは残念ですが、そのエッセイの中の短いエピソードにとても心ひかれるところがありました。』① ⑧「『あはれ何の前でござんとか、ちよつとした仕事で暇を訪れたことがあつた。そのとき、地元で出されている広報紙に、こんな意味の文章が載つていて、とても印象的だ。それは、評論家の永徳達さんの書かれたエッセイの一部です。今ここで原文を引用することができないのは残念ですが、そのエッセイの中の短いエピソードにとても心ひかれるところがありました。』① ⑨「『あはれ何の前でござんとか、ちよつとした仕事で暇を訪れたことがあつた。そのとき、地元で出されている広報紙に、こんな意味の文章が載つていて、とても印象的だ。それは、評論家の永徳達さんの書かれたエッセイの一部です。今ここで原文を引用することができないのは残念ですが、そのエッセイの中の短いエピソードにとても心ひかれるところがありました。』① ⑩「『あはれ何の前でござんとか、ちよつとした仕事で暇を訪れたことがあつた。そのとき、地元で出されている広報紙に、こんな意味の文章が載つていて、とても印象的だ。それは、評論家の永徳達さんの書かれたエッセイの一部です。今ここで原文を引用することができないのは残念ですが、そのエッセイの中の短いエピソードにとても心ひかれるところがありました。』①		（オ）の要点をまとめる。 永徳達さんのエッセイの中のエピソードにア ①「あはれ何の前でござんとか、ちよつとした仕事で暇を訪れたことがあつた。そのとき、地元で出されている広報紙に、こんな意味の文章が載つていて、とても印象的だ。それは、評論家の永徳達さんの書かれたエッセイの一部です。今ここで原文を引用することができないのは残念ですが、そのエッセイの中の短いエピソードにとても心ひかれるところがありました。』① ②「永徳達さんの生家の水は、熊本でも有名な温泉のあつたお宅らしく、かつ明治のころは地元の貴族、文字屋や、政治家や、いづれも名士が集まつて、自由に議論を交わしたりする。一種のサロンのようなおもむきがあつたのを覚えています。そして永徳さんはお家の跡で、時さんか、直に当時のエピソードとして、次のようなことを紹介しておられました。 そのころ、安永家に集まつてくる青年たちの最初の言葉は、こんなにはでも（ ）きげんや、でもなく、なん、悲しいではないか。」② ③「『あはれ何の前でござんとか、ちよつとした仕事で暇を訪れたことがあつた。そのとき、地元で出されている広報紙に、こんな意味の文章が載つていて、とても印象的だ。それは、評論家の永徳達さんの書かれたエッセイの一部です。今ここで原文を引用することができないのは残念ですが、そのエッセイの中の短いエピソードにとても心ひかれるところがありました。』① ④「『あはれ何の前でござんとか、ちよつとした仕事で暇を訪れたことがあつた。そのとき、地元で出されている広報紙に、こんな意味の文章が載つていて、とても印象的だ。それは、評論家の永徳達さんの書かれたエッセイの一部です。今ここで原文を引用することができないのは残念ですが、そのエッセイの中の短いエピソードにとても心ひかれるところがありました。』① ⑤「『あはれ何の前でござんとか、ちよつとした仕事で暇を訪れたことがあつた。そのとき、地元で出されている広報紙に、こんな意味の文章が載つていて、とても印象的だ。それは、評論家の永徳達さんの書かれたエッセイの一部です。今ここで原文を引用することができないのは残念ですが、そのエッセイの中の短いエピソードにとても心ひかれるところがありました。』① ⑥「『あはれ何の前でござんとか、ちよつとした仕事で暇を訪れたことがあつた。そのとき、地元で出されている広報紙に、こんな意味の文章が載つていて、とても印象的だ。それは、評論家の永徳達さんの書かれたエッセイの一部です。今ここで原文を引用することができないのは残念ですが、そのエッセイの中の短いエピソードにとても心ひかれるところがありました。』① ⑦「『あはれ何の前でござんとか、ちよつとした仕事で暇を訪れたことがあつた。そのとき、地元で出されている広報紙に、こんな意味の文章が載つていて、とても印象的だ。それは、評論家の永徳達さんの書かれたエッセイの一部です。今ここで原文を引用することができないのは残念ですが、そのエッセイの中の短いエピソードにとても心ひかれるところがありました。』① ⑧「『あはれ何の前でござんとか、ちよつとした仕事で暇を訪れたことがあつた。そのとき、地元で出されている広報紙に、こんな意味の文章が載つていて、とても印象的だ。それは、評論家の永徳達さんの書かれたエッセイの一部です。今ここで原文を引用することができないのは残念ですが、そのエッセイの中の短いエピソードにとても心ひかれるところがありました。』① ⑨「『あはれ何の前でござんとか、ちよつとした仕事で暇を訪れたことがあつた。そのとき、地元で出されている広報紙に、こんな意味の文章が載つていて、とても印象的だ。それは、評論家の永徳達さんの書かれたエッセイの一部です。今ここで原文を引用することができないのは残念ですが、そのエッセイの中の短いエピソードにとても心ひかれるところがありました。』① ⑩「『あはれ何の前でござんとか、ちよつとした仕事で暇を訪れたことがあつた。そのとき、地元で出されている広報紙に、こんな意味の文章が載つていて、とても印象的だ。それは、評論家の永徳達さんの書かれたエッセイの一部です。今ここで原文を引用することができないのは残念ですが、そのエッセイの中の短いエピソードにとても心ひかれるところがありました。』①	

三 授業実施計画 （平成二十五年度 三年生「現代文」三単位）

実践Ⅰ					実践Ⅱ				
実施時期	単元・教材	学習目標	学習活動	評価方法	※ 実施時期 平成二十五年十月～平成二十六年一月				
平成二十五年 九月～十一月	随筆を読んで要旨を捉えよう ・教材① 「悲しむ」 （『生きるヒント』） ・教材② 「小さな巨人の時代」 （『アルプス便り』）	文章を読んで、構成、展開、要旨などを的確に捉え、その論理性を評価する。 （内容(1)ア）	・段落ごとに要点をまとめる。 ・要旨を捉える。 ・要旨に対する自分の考えをまとめる。	・ワークシートの記述の点検 ・考えを書いたプリントの分析	単元・教材	学習目標	学習活動	評価方法	
					新聞記事を読んで要旨を捉えよう ・教材① 朝日小学生新聞 「ニュースあれこれ」 ・教材② 朝日新聞木曜日夕刊 「小池龍之介心を保つお稽古」	文章を読んで、段落ごとの要点をまとめ、要旨を捉える。	・教材①を読んで記事の見出しを考える。 ・主語と述語の関係を明確にして見出しを書く。 ・教材②③④を読んで、文章の組立てを捉える。 ・段落ごとの要点をまとめ、要旨を捉える。	・ワークシートの記述の点検	
平成二十五年 十一月～ 平成二十六年 一月	評論を読んで要旨を捉えよう ・教材① 「創造性としてのレトリック感覚」 （『レトリックを少々』） ・教材② 「漱石と文明開化」 （『文藝春秋特別版夏目漱石と明治日本』）	文章を読んで、構成、展開、要旨などを的確に捉え、その論理性を評価する。 （内容(1)ア）	・初読で段落ごとの要点と要旨をまとめる。 ・段落ごとの要点をまとめる。 ・要旨を捉える。 ・要旨に対する自分の考えをまとめる。	・ワークシートの記述の点検 ・考えを書いたプリントの分析					

* 「学習目標」の（ ）内は、「高等学校学習指導要領」「現代文B」の、どの内容に該当するかを示す。

四 授業実践

（一）授業実践Ⅰ

〈実施時期・対象〉 平成二十五年九月～十一月・三年生 五クラス
 〈単元〉 随筆を読んで要旨を捉えよう
 〈教材〉 教材①「悲しむ」（『生きるヒント』）
 教材②「小さな巨人の時代」（『アルプス便り』）

ア ねらい

随筆を読んで、文章の組立てを意識することに慣れさせ、要旨を的確に捉えさせる。

イ 授業展開と指導上の留意点

（ア）教材①を用いる。

(ウ) 段落ごとに、文章の組立てを理解させる。

生徒に発表させ、クラス全員で確認していく。

(エ) 段落ごとに、要点をまとめさせる。

a 話題の中心を見付けさせる。

b 話題に対してどう結論付けているか、該当する表現を探させる

c 空欄補充の形で、段落の要点をまとめさせる。

d 要点を踏まえ、分かりにくい表現や語句について補足説明をする

(才) 要旨を捉えさせる。

a ワークシート【資料1】の各段落の要点の見直しをさせる。

b 要旨記入用紙【資料2】を配付し、要約と要旨を書かせ提出させる。

c 文章の組立てが理解できたか、要旨を捉えられたかという点について要旨記入用紙に自己評価を書かせる。

d 授業者が、提出された要旨記入用紙を点検する。

e 授業者が、生徒に要旨記入用紙を返却し、生徒全員に評価の観点を示した上で、要旨を捉えられなかった要因について解説する。参考として、要旨をまとめた例を生徒に示す。

(力) 要旨に対して自分の考えをまとめさせる。この活動の目的は、書き手の意図を捉えさせることである。

a
今までの授業を振り返らせる。

b 二百字の原稿用紙を配付し、要旨に対する自分の考えを書かせる。

c 評価は次のとおりである。

A: 要旨を踏まえて、自分の考えを論理的に展開している。

B: 要旨を理解し、自分の考えも書いている。

C: 要旨を理解していない。

d 授業者が評価Aの生徒の作文を発表し、生徒に意見を共有させることで、筆者の考えに対する理解を深めさせる。

(キ) 教材②を用いて、
(イ) 〃
(カ) を行う。

○要旨を捉えてみよう。(三十字程度)

る	深
の	く
だ	悲
	し
	む
	も
	の
	こ
	そ
	本
	当
	の
	よ
	ろ
	こ
	び
	に
	出
	あ
	え

◆アンケート

一、段落中の文の組み立てが理解できましたか。

（十分に理解できた）

だいたい理解できた

あまり理解できなかった

理解できなかった。

理由

事實を上げたあとに筆者の感想や意見がくることが多いと思った。

二、段落ごとに要点をまとめ、要約をすることで、筆者の主張（要旨）を読み取ることができましたか。

—十分に理解できた

だいたい理解できた

あまり理解できなかった

理解できなかった

理由

6

わかりやすく要点・要約をまとめると簡単に話しがわかった。

【資料3】「悲しむ」の要旨に対する生徒の考え

◎評価Aの作品

私は、悲しみを率直に言えるような感性も大事だと思うが、それと同時に行動することが大事だと思う。例えば、東日本大震災について言うと、被災者はもちろん日本のみんなが悲しい思いをした。そういう人たちはテレビなどで悲しみを伝え、被災地復興のためにがれきの撤去などを行っている様子をよく見た。私は悲しみの声や様子を見て、自分にできることは何なのかを考えるようになった。このように言葉や行動は周りの人の心を動かせるものだと思っている。

◎評価Cの作品

悲しみは自分のことを成長させてくれるものだと思う。悲しみは人それぞれだけれども、私は友達など信じていた人に裏切られたときが一番の悲しみかなと思う。その人のことを信じてその人にしか話をしていないこともあるのに、周囲に話をされていたときは悲しいと感じる。でも、その分その悲しみから学ぶこともあると私は思う。だから、悲しみは自分を成長させてくれるものだと思っている。

【資料4】「小さな巨人の時代」の要旨に対する生徒の考え

◎評価Aの作品

私は高性能化してきたスマートフォンが生活に悪い影響を与えていると思う。なぜなら私は、スマートフォンを使い始めると、インターネットで検索したり、ゲームをしたりと使い続けてしまいやるべきことができなくなることが多いからだ。このように、私たちは自分の時間がコントロールできなくなる危険性がある。対策として、私は帰宅するとすぐに引き出しにしまうようにしている。時間を有効に使うためには、この危険性を頭に入れ自分なりの工夫をする必要がある。

ウ 考察と反省

(ア) 教材①(「悲しむ」)を用いた授業実践について

【資料1】のワークシートを用いて文章を「事実(具体例)」と「筆者の感想や意見」に分けさせたが、生徒はその方法が分からず戸惑っていた。そこで、文頭の「例えば」、文末の「考える」「思う」などの表現に注目すると良い等の助言をした。

【資料2】の自己評価から、【資料1】を用いることで、八十%の生

徒が文の組立てを理解できたと感じていたことが分かった。また、生徒の八十八%が段落ごとの要点をまとめ、要約することで、要旨を読み取ることができたと感じていた。自由記述には、「文章の内容を細かく区切って見ていくことで、段落の重要な部分を見落とすことなく読み取ることができた。」とあった。「事実(具体例)」は、筆者の主張を明確にするためのものだということが理解できた。」という感想もあった。

授業者が「① 本文の一番重要な文を活用できている」「② 重要な言葉(悲しみ)が入っている」「③ 主語(わたしたち・現代人)が入っている」「④ 必要のない部分が入っていない」の四つの観点で点検したところ、実際に要旨を捉えられた生徒は、五十五%であった。生徒の自己評価との差が三十三ポイントも生じたのはなぜだろうか。

その要因として、九十一%の生徒が①を達成できているので、たとえば②③④のいずれかが不十分であっても、要旨を捉えられたと誤ってしまっただけということがある。例えば①は達成しているが、④が不十分な生徒が十八%いる。授業者から見ると、彼らは要旨を的確に捉えられていない。しかし、生徒は①ができていたので要旨を捉えたと判断しているということである。また、これは、要旨を述べるために必要な要素を生徒が理解していないことの表れでもある。そこで、授業者がまとめた要旨を示し、生徒に自分の書いた要旨と比較させた。その際、評価の四つの観点を示し、要旨を述べる際に何が必要で何が不要でないかを確認させた。

(イ) 教材②(「小さな巨人の時代」)を用いた授業実践について

「小さな巨人の時代」を教材にして再度実践したが、生徒が取り組む様子を見ると、ワークシート【資料1】を用いることに慣れ、主体的に文章の内容を読み取ろうとするようになった。要旨を捉えることができた生徒は六十二%であり、前回より九ポイント上回った。要旨記入用紙【資料2】の自由記述には、「文章を事前に分けてあったので、その部分がどんな役割かが理解できた。」「筆者の感想や、意見の中に、筆者の言いたいことが書かれていると分かった。」という感想があった。生徒が文章の組立てについて、理解し始めていることを示していると考えられる。

なお、教材①を用いた授業の課題を踏まえ、教材②を用いた授業では、

評価の四つの観点とともに授業者がまとめた要旨を示し、生徒に自分の書いた要旨を比較させ、要旨には何が必要で何が必要でないかを確認させた。

要旨を確認させた後に、要旨に対して生徒の考えをまとめさせた。この言語活動の目的は、書き手の意図を理解させることである。教材①で、書き手の意図を捉えた評価B以上の生徒は、六十二％、評価Cの生徒は、三十八％であった。評価Cの生徒は、「悲しみ」というキーワードに対する自分の考えを述べているだけで、書き手の意図を踏まえていないものが多かった【資料3】。そこで、教材②では、この言語活動の目的を再度説明した。生徒は書き手の意図を捉えようと主体的に要旨を確認しながら文章を再読していた。その結果、評価B以上の生徒は九十％となり、前回よりも二十八ポイント上回った【資料4】。

（ウ）今後の課題について

授業実践Ⅰを通して、生徒は、文章の要旨を捉えられるようになり、書き手の意図も理解できるようになった。しかし、これは生徒が文章の要旨を捉える上で、ワークシート【資料1】を用いた結果である。特に、それぞれの段落の要点をまとめる方法は、ワークシートにおける空欄補充であり、生徒が自らの力で要点をまとめたとは言えない。授業実践Ⅰを実施しただけでは、生徒が自分の力で文章の組立てを捉えて、要点をまとめられるようになるのは困難である。生徒が自分の力で文章の要旨を捉えられるようになるためには、文章の要点を捉える学習を継続的に行うことが必要であると痛感した。そのためには様々な文章を生徒に読ませる必要性も感じた。授業実践Ⅱにおいて、この課題に取り組みたい。

（二）授業実践Ⅱ

〈実施時期・対象〉 平成二十五年十月～平成二十六年一月

三年生 五クラス

〈単元〉 新聞記事を読んで要旨を捉えよう

〈教材〉 教材「朝日小学生新聞」「心を保つお稽古」（朝日新聞）

「朝日新聞社説」「朝日新聞グロープ」

ア ねらい

生徒にとって身近なことが書かれている短い文章を複数回読ませることで、要点をまとめ、要旨を捉えることに慣れさせる。

イ 授業展開と指導上の留意点

（ア）授業の冒頭の十分程度の時間を使い要旨を捉えさせる。

（イ）教材として取り上げる文章は、身近なニュースを平易にまとめた新聞記事、随筆、社説、政治や文化についての意見文とし、段階を踏んで内容の難しいものを読ませる。

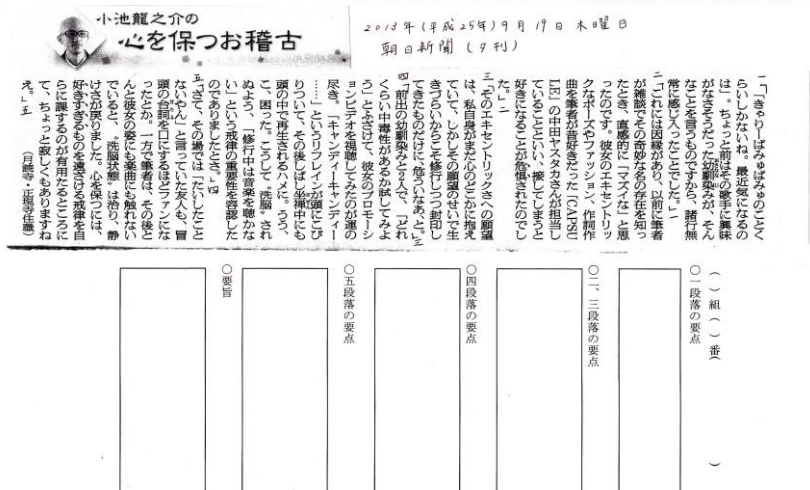
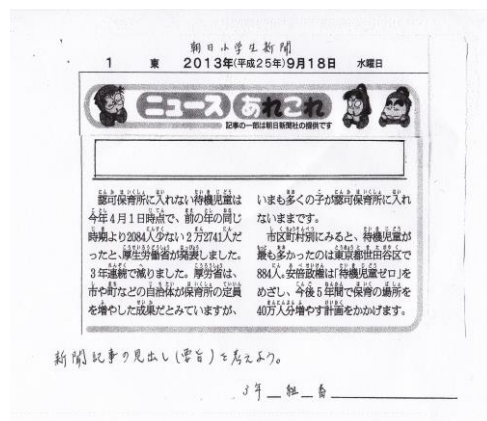
（ウ）教材として取り上げる文章の文字数は、二百字前後、六百字前後、千字前後、千二百字前後と、段階を踏んで増やしていく。

（エ）段落分けは、授業者が最初に示し、段落ごとに要点をまとめさせながら要旨を捉えさせる。

【資料5】教材と要旨の捕捉率の推移

回数	教材	学習目標	要旨の捕捉率
1	朝日小学生新聞 「ニュースあれこれ」 （地球温暖化について）	記事の要旨を捉える。	92/ 180人 (51%)
2	朝日小学生新聞 「ニュースあれこれ」 （自動車の自動運転について）	記事の要旨を捉える。	35/ 170人 (21%)
3	朝日小学生新聞 「ニュースあれこれ」 （待機児童について）	記事の要旨を捉える。	107/ 174人 (62%)
4	朝日新聞木曜日夕刊 「小池龍之介 心を保つお稽古」 （きやりーばみゅばみゅの魅力）	文章を読んで、段落ごとの要点をまとめ、要旨を捉える。	98/ 175人 (56%)
5	朝日新聞木曜日夕刊 「小池龍之介 心を保つお稽古」 （自分を保つためには）	文章を読んで、段落ごとの要点をまとめ、要旨を捉える。	105/ 174人 (60%)
6	朝日新聞社説 （日韓問題）	文章を読んで、段落ごとの要点をまとめ、要旨を捉える。	33/ 174人 (19%)
7	朝日新聞社説 （原発問題）	文章を読んで、段落ごとの要点をまとめ、要旨を捉える。	20/ 172人 (12%)
8	朝日新聞社説 （楽天初優勝）	文章を読んで、段落ごとの要点をまとめ、要旨を捉える。	59/ 174人 (34%)
9	朝日新聞グロープ （米とTPP）	文章を読んで、段落ごとの要点をまとめ、要旨を捉える。	15/ 169人 (9%)
10	朝日新聞グロープ （祭りとは）	文章を読んで、段落ごとの要点をまとめ、要旨を捉える。	54/ 165人 (33%)

【資料6】使用した新聞教材例



ウ 考察と反省

短い文章を読む導入として小学生新聞を用いた。平易な文章なので生徒の取組も良く、クイズ感覚で楽しんでいた。導入として効果的な教材であった。一回目と三回目は、主語と述語で成り立つ要旨であったため、要旨を的確に捉えた生徒は半数を超えた。二回目の教材は、主語と述語に加えて、条件となる語句(今回は場所を限定する語句)に気付く必要があったため難しかったと考えられる。なお、要旨をまとめさせる際に

は、まず話題の中心は何か、それがどうしたのかを確認し、さらに、内容によっては条件(時、場所、方法等)を付け加えなければならぬこと、最小限の言葉で相手に伝わる表現にすることを指導した。

四、五回目では、生徒にとって身近な事柄が書いてある随筆を読ませた。要旨を的確に捉えられた生徒は、それぞれ五十六%、六十%であった。しかし、七回目以降の社説や意見文については、内容が身近に感じられず難しかったようだ。要旨を的確に捉えた生徒は、社説において、それぞれ十九%、十二%、三十四%であり、意見文において、九%、十三%だった。社説の「楽天初優勝」や意見文の「祭り」のように、身近で親しみやすい内容であっても、文字数が多く、抽象的な表現が使われていると、要旨が捉えられないことが分かった。社説や意見文の要旨を的確に捉えられた数値は低かったが、回数を重ねるごとに数値が上がることを考えると、生徒が文章を読み、繰り返し要点をまとめ、要旨を捉えていくことで、「読む力」を向上させることができたと実感した。

しかし、今回の実践では、抽象的な表現が使われている文章を教材として取り上げるのが早かったために、「読む力」が十分に向上したとは言えなかった。今後は、平易で短い文章を継続的に数多く読ませることとで確実に要旨を捉えられるようにする必要がある。生徒の状況を含め内容の捉えにくい文章を読ませることで、生徒の「読む力」が向上するはずである。また、主体的に文章を読む姿勢を育むためには、生徒にとって親しみやすく、論理構成がしっかりした文章をあらかじめ用意する必要があると考える。

(三) 授業実践Ⅲ

《実施時期・対象》 平成二十五年十一月～平成二十六年一月

《単元》 三年生 五クラス

《教材》 評論を読んで要旨を捉えよう

《教材》 教材①「創造性としてのレトリック感覚」

(『レトリックを少々』)

教材②「漱石と文明開化」

(『文藝春秋特別版夏目漱石と明治日本』)

評論を読んで、文章の組立てに慣れさせ、要旨を的確に捉えさせる。

(ア) 初読で段落ごとの要点をまとめさせ要旨を捉えさせる【資料7】
 (イ) 授業実践Ⅰのイの(イ)～(エ)に同じ。
 (ウ) 要旨を捉えさせる。

a ワークシート【資料1】の各段落の要点を見直させる

b 要旨記入用紙【資料8】を配付し、要旨を書かせ提出させる

c 初読の要旨と、授業後の要旨とを比較させ、自己評価させる

d 授業者が、生徒の要旨記入用紙について、要旨が捉えられているか点検する。

e 授業者が、生徒に要旨記入用紙を返却し、生徒全員に評価の観点を示した上で、要旨を捉えることができなかった要因について解説する。参考として、要旨をまとめた例を生徒に示す。

(エ) 要旨に対して自分の考えをまとめさせる。この活動の目的は、書き手の意図を捉えさせることである。

a
今までの授業を振り返らせる。

b 筆者の考えに同意する形で自分の考えをまとめさせる。

c 筆者の考えに同意する理由とその根拠となる具体例を挙げさせる。

d 二百字の原稿用紙を配付する。筆者の要旨に同意する理由を、具
 体例を挙げて説明し、自分の考えをまとめさせる。

e 評価は次のとおりである。

A: 要旨を踏まえ、具体例を挙げ説明ができています。自分の言葉で要旨を置き換えてまとめている。

B: 要旨を理解し、具体例を挙げ説明ができています。

〔C〕要旨を理解していない。

f 授業者が評価Aの生徒の作文を発表し、生徒に意見を共有させることで、筆者の考えに対する理解を深めさせる。

【資料7】初読で要点と要旨をまとめさせたワークシート

[illegible][illegible]

【資料9】 「創造としてのレトリック感覚」の要旨に対する生徒の考え

◎評価Aの作品

レトリック感覚は、人を理解するために必要な感覚である。なぜならば、相手の立場に立ってみると自分の意見だけではないと気付く、相手の意見も考えることができるからだ。例えば、私が外出時に母からの電話に気付かず叱られた時のことである。私は気付かなかったから仕方無いと言い張りけんかになった。しかし、母の立場で考え私を心配していたと気が付き謝ると、母も言い過ぎたと言ってくれた。このように、一方で自己主張をやめ相手のことを考えれば、お互いに理解できる。

【資料10】 「漱石と文明開化」の要旨に対する生徒の考え

◎評価Aの作品

「内発的」である必要性は、周りの意見ばかり取り入れていると、自分で一から考えることができなくなるからだ。

例えば、外出の予定などをいつも人まかせに「外発的」でいると、いざ自分で予定を立てようとしてもできないのだ。どれもこれも自分で考えて予定を立てられない。これは、自分の意見を主張する場でもそうだろう。自分の考えを持つことは、説得力のある強い言葉で言うことができることだ。その強力な武器を作ることが、内発的である必要性だ。

◎評価Cの作品

「内発的」である必要性は、外見だけが変わっても中身が変わっていなければ意味がないからだ。例えば友達関係や人間関係などで、初めはその人の雰囲気や見た目などの外見で判断して話しかけたりすることもあるが、実際その人の中身は外見とは全く違って、とてもだらしない、外見と合っていないことがある。いくら外見に清潔感があったとしても、中身を知っていくことにだらしないさが分かれると、外見が良くても意味がないと思った。

ウ 考察と反省

(ア) 教材①(「創造性としてのレトリック感覚」)を用いた授業実践について

生徒に初読の段階で文章の要旨をまとめさせた。今回取り上げた文章

は授業実践Iで取り上げた文章よりも難解であるが、要旨を捉えることのできた生徒は、全体の二%であった。しかし、ワークシート【資料1】を用いて文章の組立てを把握させながら読ませたところ、要旨を捉えられた生徒は、全体の四十二%であった。その後、さらに書き手の考えに対して生徒に意見を書かせたが、その内容から書き手の意図を理解していると判断できた評価B以上【資料9】の生徒は、八十六%であった。このことから、生徒が評論の要旨をいきなり捉えるのは難しいが、ワークシートを用いれば、生徒にとって身近に感じられない内容であっても要旨が捉えられ、書き手の意図を理解できることが分かった。

(イ) 教材②(「漱石と文明開化」)を用いた授業実践について

生徒に初読で文章の要旨をまとめさせた結果、要旨を捉えられたのは、全体の六%であった。教材①を用いたときと比べても四ポイント上回っただけであった。しかし、教材①を用いたときと同様、ワークシート【資料1】を用いて要旨を捉えられた生徒は、全体の四十九%、さらに書き手の意図を理解していると判断できた評価B以上の生徒は五十七%であった。これは低い数値かもしれないが、内容がそれだけ捉えにくい文章であることを示している。それにも関わらず初読で六%(書き手の意図を捉えられた率が八十六%の教材①の初読では二%)ワークシートを用いて四十九%(教材①では四十二%)の生徒が要旨を捉えられていることを考えると、生徒の「読む力」は少しずつ伸びていると考えられる。

また、書き手の意図を捉え、自分の考えを発展させることのできた評価A【資料10】の生徒は、三十%であった。本研究で生徒に読ませた文章の中では最も難解であるにも関わらず、本研究の実践の中で一番良い結果となった。これもワークシート【資料1】を用いることで、生徒が主体的に、要旨を捉え、書き手の意図を捉えられるようになった効果だと考えられる。

ところで、教材②の要旨を初読の段階で捉えられなかった主な要因は、文章の主語が書かれていないこと(六十%)、主語以外の必要な言葉(時、場所等)がないこと(三十%)が挙げられる。これらのことは、これまで繰り返し指導してきたことである。しかし、生徒は、初読の長い文章を目の前にすると忘れてしまう傾向にある。初読の段階で要旨を

捉えられなかった生徒の自己評価に、「初読のとき、漱石の考えと筆者の意見が区別できなかった。」という記述があり、十％の生徒が同趣旨のことを書いていた。この教材は、漱石の引用文を用いて筆者の考えを展開することが多く、そのため、生徒が「事実（具体例）」である引用部分と、「筆者の感想や意見」とを混同したのだろう。

生徒が文章の形式に混乱しないためにも、文章の組立て（「事実（具体例）」と「筆者の感想や意見」）を常に意識させ、読ませていくことが大事であると実感した。

五 まとめ

【資料11】平成二十五年度末アンケート

〈実施時期 平成二十六年一月／対象 三年生 百七十七名〉

質問1 以前に比べて筆者の言いたいことが分かるようになりましたか。

- ① 分かるようになった 22%
- ② 少し分かるようになった 70%
- ③ あまり変わらない 6%
- ④ 全く変わらない 2%

質問2 様々な文章を読んで、段落ごとに要点をまとめ、要旨を捉えてきました。このことは、教科書の教材等の要旨を捉えることに効果がありませんか。

- ① 効果があったと思う 54%
- ② 少し効果があったと思う 44%
- ③ あまり効果があったと思わない 1%
- ④ 全く効果があったと思わない 1%

質問3 授業の感想を自由に書いてください。（抜粋）

- ・段落ごとに要点をまとめることで要旨が捉えやすくなった。 33%
- ・事実（具体例）、筆者の感想や意見に分けることで要点をまとめることができるようになった。 16%
- ・プリントを使うことで以前より要旨が捉えられるようになった。 8%
- ・新聞記事をやった良かった。 21%
- ・新聞記事など、何回も要点をまとめ要旨を捉えることで、筆者の意図や重要なところが分かるようになった。 20%

【資料12】授業実践Ⅰ・Ⅲにおける要旨の捕捉率等

授業実践		Ⅰ		Ⅲ	
教材		①	②	①	②
要旨を捉えられたか	初読			2%	6%
	授業後	55%	62%	42%	49%
書き手の意図を理解できたか		A	5%	19%	12%
		B	57%	71%	74%
		C	38%	10%	14%

（一）仮説の検証
生徒の「読む力」を向上させる上で、仮説が有効であったかどうかを検証する。

仮説

① 文章の組立てを把握するための手順を確認しながら、文章を読むことを繰り返すことで、書き手の意図を捉えることができるのではないかと。

ワークシート【資料1】を用いることで、授業実践Ⅰの教材①では、五十五％の生徒が、教材②では、六十二％の生徒が要旨を捉えられた。また、授業実践Ⅲの教材は、文章の難度が高い評論にも関わらず、教材①では、四十二％の生徒が、教材②では、四十九％の生徒が要旨を捉えられた。文章の組立てを把握しながら読み、短い単位で要点をまとめることで「長い」「ごちゃごちゃした」文章でも、要旨を捉えられるようになった。また、年度末アンケート【資料11】の質問1でも、九十二％の生徒が要旨を捉えられるようになったと回答している。質問3でも、「段落ごとに要点をまとめることで、要旨が捉えやすくなった。」という意見が三十三％、「事実（具体例）、筆者の感想や意見に分けることで要点をまとめることができるようになった。」という意見が十六％、「プリントを使うことで、以前より要旨が捉えられるようになった。」という意見が八％であった。このような意見から、生徒はワークシートを使って要旨を捉える

実践の効果があつたと実感していると考えられる。

しかし、授業実践Ⅲの教材②の段階でワークシートを用いずに初読で要旨が捉えられた生徒は六％であり、生徒が自力で文章を段落に分け、要点をまとめる力を付けるまでに至ったと評価するには人数が少ない。だが、教材①と比べると、初読で要旨を捉える力が付いた兆しが見られた。

また、要旨を主体的に捉えさせる学習活動を繰り返し、要旨を理解させた上で自分の考えを述べさせる言語活動を実施した。この活動により、書き手の意図を捉えることができるようになったと考えられる。さらに自分の考えを深めることができた生徒も増えた。これは【資料12】の評価Aの割合が、授業実践Ⅲの教材②において三十％に至ったことから説明できる。

仮説

② 生徒にとって身近なことが書かれている短い文章を読んで要旨を捉えることに慣れさせていけば、長くて論理的な文章においても要旨を捉えられるようになり、書き手の意図を捉えることができるのではないか。

年度末アンケート【資料11】の質問2で、授業実践Ⅱが、要旨を捉える力を身に付ける上で効果的であつたと評価している生徒は九十八％であつた。さらに、質問3の感想に、「新聞記事など、何回も要点をまとめ要旨を捉えることで、筆者の意図や重要なところが分かるようになった。」という意見が二十％、「新聞記事をやつて良かった。」という意見が二十一％であつた。その他の意見として「簡単な文章から取り組んだので分かるようになった。」「文章の大事なところが速く見付けられるようになった。」とあつた。生徒は授業実践Ⅱを通して、以前より文章の要旨が捉えられるようになったと実感している。

また、授業実践Ⅲでは、生徒にとって捉えにくい内容の評論であつたにも関わらず、生徒は戸惑うこともなく主体的に段落ごとの要点をまとめ、要旨を捉えることに取掛かることができた。教材②については、途中であきらめることもなく、書き手の意図を捉えつつ自分の考えを深めることができ、評価Aの生徒は全体の三十％まで高まつた。これは、実践Ⅱを通して、様々な新聞記事を読み、要旨を捉えることを繰り返したことで、生徒の評論や随筆に対する苦手意識が解消されたことの表れである。

(二) 今後の課題

授業実践Ⅰ・Ⅲについては、文章の要旨を捉える方法に慣れることを優先したため、段落分けや文章の組立ての仕分けをするための準備についてあらかじめ提示していた。これらのことを自力で行えるように、ワークシート【資料1】の工夫が必要である。また、年間計画を立てる際に、論理構成が明確なものや身近な題材の文章から始め、文章の難度を上げていくことが大事だと気付いた。授業実践Ⅱについては、要旨の捕捉率や生徒の感想から考えると、継続的に取り組むことで、さらに効果を上げることができると考える。

六 おわりに

本研究は、「読む力」を向上させるための指導の工夫に主眼を置いたため、今までの授業とは指導方法を変えた。そのため、実践を始めた頃は戸惑う生徒が多く、このまま続けても良いのかと不安を覚えたこともあつた。しかし、生徒から「今日は何の記事を読むの。」「今日こそ当ててやるぞ。(要旨を捉えてやるぞ。)」という声を聞き、励みになった。また、生徒に一年間の授業の感想を書かせたが、その中に「文章を理解するために自分で書くことがとても多くて大変だったが、今とても身に付いていると思う。」や、「現代文は昔から嫌いだったが、少しずつ筆者の言いたいことが分かるようになり、楽しかった。」というものもあり、実践を通して生徒の現代文に対する苦手意識を少しでも解消できたことをうれしく思う。今後も生徒が現代文の授業に対して、積極的に参加し、文章を読み取る楽しさを体験できるように、授業の工夫を心がけたい。

最後になりましたが、今回の研究にあたり貴重な御助言と親身な御指導を賜りました指導主事の先生方、教科指導員の先生方、教科研究員の先生方、そして、本校の先生方、生徒諸君に厚く御礼申し上げます。

(参考文献)

- 『読みの力を育てる用語』 白石 範孝 編著 (東洋館出版社)
『国語教育指導用語辞典』 田近 洵一・井上 尚美 編 (教育出版)
『中学校・高等学校 PISA型「読解力」——考え方と実践——』
田中孝一 監修 (明治書院)